

# SAPPORO 教区 NEWS

第22号

2014年4月30日

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部  
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10Tel. 011-241-2785 / ホームページ: <http://www.csd.or.jp>

## 主のご復活を心からお喜び申し上げます！！



### 教会運営における共同体の役割

司教 ベルナルド 勝谷 太治

司教になって半年、毎週各地の小教区を回って歩いていますが、教区外への頻繁な出張もあり最近少々疲れがみえます。とはいえ、教会の活動は待ったなしです。教区が抱えている課題に取り組みたい、今進めているのは課題に応じた信徒の専門家による複数の諮問委員会を発足させることです。そしてまた、各教会を訪問して聞かれることの多くは、今後の教区ビジョンについてです。これについては、教区の宣教司牧評議会等で皆さんの意見を聞きながら調整して一緒に作り上げていきたいと考えています。しかし、以前から一つの方向性として検討されてき

た課題があります。それは教会の小共同体化です。現代の教会は開かれた教会、社会と共に歩む教会ということが叫ばれ、信徒の役割が強調されています。しかし、それは単に信徒一人一人がそれぞれの生活の場で孤独に努力することが求められているわけではありません。教会共同体に所属する信徒一人一人が有機的に協力し合い宣教司牧活動を行っていくよう求められているのです。更に、信徒、司祭、修道者が協力し合ってビジョンを共有し、地区における一貫した宣教司牧にあたる必要があると考えています。すでに、各地区で宣教司牧

体制の見直しや協議会や評議会等の組織の見直し、典礼や要理を担当する信徒の養成などがなされてきました。しかし、組織の改編や、一握りのエリート信徒をつくることによってだけでは教会の活性化は望めません。

#### 社会学者の指摘（三つの原理）

1. 個人の信念や態度、価値観、生活様式は（それ故キリスト教信仰も）、大いにその環境によって影響され形作られる。したがって、人が生き生きと信仰に生きようとするなら、キリスト信仰の環境を必要とする。
2. キリスト者の成長において、環境要因は制度要因よりもはるかに根本的なものである。それ故、司牧の配慮は教会の制度を改善するというよりもまず、キリスト信仰を育てる環境をつくるべきである。
3. 社会全体がキリスト教を受け入れていない場合、信仰生活を可能にするために社会の中にキリスト者の共同体を形成する必要がある。

右記指摘のように、私たちの生活の場における信仰共同体を形成することによって、信者全体の宣教に対する意識の底上げを計り、信仰生活の活性化を目指すことが必要に思えます。そのために今世

界的に注目されているのが、教会の小共同体化です。この小共同体は集まりやすい少数のメンバーで形成され、信仰や生活の分かち合いを行います。場合によっては仕事の時間で都合がつけやすい人たち、教師や看護師等の同種の職業の人たちによって形成され、同じ小教区に属している必要は必ずしもありません。

しかし、これを札幌教区やそれぞれの地区の実情にあわせて考えると、そのまま適応させることは困難です。現状からすると既存の家庭集会の延長上で考えた方がよいかもれません。集まる場所も家庭である必要はなく、大切な場所は所ではなくメンバーです。教会の組織図にこだわりすぎる必要はありませんが、やりたい人がやる「運動」にならないために教会の組織の中の最小単位として位置づけるのが適当と思えます。重要なことは小教区内でこれに参加できない人たちを区別するような排他的な「運動」とならないようにすることです。「分かち合い」についても、苦手意識を持っている信徒が多いことが分かってきましたので、「井戸端会議」的なものから始めてもよいでしょう。いずれにしても、具体的な適応については今後の検討課題であり、是非各地区各小教区で、この小共同体について話し合いを始めていただきたいと思います。時期を見て、皆さんのアイデアや意見を聞く機会を設けたいと考えています。

# 東日本大震災被災者追悼・復興祈願ミサ

大地震発生から丸3年目の3月11日、北一条教会で午後2時から今田玄五司教総代理の司式で執り行われた（勝谷司教は仙台で行われる日本司教団の追悼ミサに出席のため不在）。

ミサには約170名の司祭、修道者、信徒の皆さんが参加し、午後2時46分には、鐘を鳴らして黙想し、被災者と本当の復興のために祈りを捧げました。

ミサの後には、宮古ベース世話人の一人である和田真一さんから、ボランティアの活動内容と宮古の現状が報告され、約130名の方々が耳を傾けていら



＝北1条教会の被災者追悼・復興祈願ミサ＝

しゃった。被災地の人々が必要としている限り、ボランティア活動を続けていく決心を新たにしていきました。

これに先立ち、10日（月）午後6時から仙台カテドラルで、フランシスコ教皇からの「このミサの意向に心を合わせて祈っています」とのメッセージを託された教皇大使も出席し、日本の司教団主催の追悼と復興祈願のミサを行いました。祈りを捧げ、3年間を振り返り、これからも復興を支援していく決意を宣言されました。



＝日本司教団による被災者追悼・復興祈願ミサ＝

# 勝谷司教叙階後初めての聖香油のミサ

受難の火曜日である4月15日午前11時から聖香油のミサが行われた。（※）

ミサでは、病者の油、洗礼志願者の油が祝別され、香油が聖別され、主の晩餐の制定の記念日であることから司祭の約束の更新が行われた。

説教の中で、勝谷太治司教は、神学校時代から使用している典礼書を見直したが、聖香油のところだけがきれいなままであり、司教になって初めての聖香油のミサであることを実感したと語った。また、典礼書を読み解いていくうちに、司教は司祭団一致の要であり、聖香油のミサでの油の祝別と聖別は司教にしか許されていない権限であり、司祭の権能も司教が認め委任することがなければ認められないことであることを考えさせられた。しかし、司教と言う役割に対して尊敬されているのであって、司教個人の人格に対してではないのであって、そうでなければ傲慢な世界に陥ってしまう。司祭も同様であり、司祭個人の人格に対し



てではなく、司祭の役割に対する尊敬であることを忘れてはならない。「教会＝司教」と言われるが、教会は神の民である。司教が存在するのは、奉仕するためであり権力のためではない。自分に与えられた役務を心に深く刻む必要がある、仕えるものとして教会に仕えることが出来るようにしたい。司教も司祭も人間であり、弱い立場の人間である。一般の家庭のよう

に相談する相手もない。信者の皆さんが司教や司祭を支え、見守って頂きたい。神の国を築いていけるように共に祈っていきましょと結ばれた。

※聖木曜日（の）の典礼としての聖香油のミサを、北海道が広範囲なため、司教的配慮より受難の火曜日の午前に札幌教区では執り行っています。



# アシジのフランシスコ

## 中江 洋 神父様が帰天

教区司祭アシジのフランシスコ中江洋神父が2月6日午前11時17分77歳の生涯を終え神のもとに召された。葬儀ミサは、2月8日 ベルナルド勝谷太治司教の(土)午前10時、北一条教 司式で行われました。会(札幌司教座聖堂)で、 勝谷太治司教は、説教と



喪主としてのあいさつの中で、故中江洋神父様は、長い間病氣と闘いながらも、人生の弱さを自分の命と受けとめて、命を生かすものとしての生涯をお捧げになったこと、特に、教区司祭の養成に尽力を注がれ、フランシスコの精神を礎として、愛されることよりも愛することを、理解されるより理解することを大切にされ、私たちを支えて下さったことに感謝を述べ、これからも神父様の安息と、ご遺族のために祈ってくださいと結ばれた。

# ベネディクト

## 荒木関 巧 神父様が帰天

教区司祭のベネディクト荒木関巧神父が2014年4月9日午後7時52分に大分岡病院で大腸がんのため神様のもとに召された。

通夜、葬儀ミサは、大分教会(大分司教座聖堂)で行われ、13日夕にお骨となり札幌に戻ってこられました。

翌日の14日午前11時から北一条教会(札幌司教座聖堂)で、神父様の追悼ミサがベルナルド勝谷太治司教の司式で行われ、約3000人の司祭、修道者、信徒が参列し神父様に感謝し神様のみもとでの安息を祈りました。



＝大分司教座聖堂での葬儀ミサの様子＝



ミサの説教では小神学校からの同期である千徳康雄神父が、故荒木関巧神父様との思い出を交えて、いつも自分を導いてくれたことや、信仰や神学についての執筆を盛んに行っていたこと、み言葉に語られている神様のみ心を宣べられた。最後に喪主として勝谷太治司教が挨拶をなさり、今まで



頂いた皆様のお祈りに謝意を述べ、これからも、故荒木関巧神父様の安息とご家族のためにお祈りくださいと結ばれた。

## ◆2014年札幌司教区の司祭異動

※ ( ) 内は前任内容

## ●札幌地区（4月21日付け）

- ・北一条教会主任司祭 後藤 義信師（宮前町・江差主任司祭）
- ・円山教会主任司祭 ケン・スレイマン師（天使大学講師）  
※引き続き、天使大学講師を兼務
- ・山鼻・真駒内教会主任司祭 宋 榮峻師（東室蘭・登別主任司祭）  
※宋師は山鼻教会の居住となります
- ・富岡・住ノ江・倶知安教会主任司祭 オール・フランソワ師（湯川・八雲主任司祭）
- ・北26条・手稲・花川教会主任司祭 場崎 洋師（北26条主任司祭）  
※場崎師の居住は従前通り北26条教会となります
- ・月寒・小野幌・北広島教会主任司祭 祐川 郁生師（月寒・北1条主任司祭）  
※祐川師の居住は従前通り月寒教会となります
- ・恵庭・千歳教会主任 マイレット・ジェームス師（住ノ江・富岡主任司祭）
- ・岩見沢教会主任司祭代行 宮部 登師（岩見沢協力司祭）
- ・新田教会主任司祭代行 谷内 武雄師（新田協力司祭）
- ・札幌地区協力司祭 ロー・ジュール師（元町主任司祭）  
※ロー師は月寒教会の居住となります
- ・ベネディクト・ハウス館長 新海 雅典師（小野幌主任司祭）

## ●苫小牧地区（4月21日付け）

- ・東室蘭・登別教会主任司祭 上杉 昌弘師（円山・山鼻・真駒内主任司祭）  
※上杉師は、引き続き教区事務局長を兼務し、東室蘭教会の居住となります

## ●函館地区（4月21日付け）

- ・元町・八雲・江差教会主任司祭 今田 玄五師（手稲・花川・倶知安主任司祭）  
※今田師は元町教会の居住となります
- ・宮前町・湯川教会主任司祭 千徳 康雄師（千歳・恵庭・北広島主任司祭）  
※千徳師は宮前町教会の居住となります
- ・旭ヶ岡の家付き司祭 薄田（すすきだ） 昇師（イエズス会・ロヨラハウス）

## ●旭川地区（4月21日付け）

- ・砂川・滝川教会主任司祭 ナルチゾ・カヴァッツォラ師（帯広・柏林台・池田・本別主任司祭）  
※ナルチゾ師は砂川教会の居住となります
- ・旭川地区協力司祭 戸田 三千雄師（釧路地区協力司祭）  
※戸田師は神居のフランシスコ修道院の居住となります。  
※また、ドミニコ師は神居のフランシスコ修道院の居住となります

## ●釧路地区（4月21日付け）

- ・帯広・柏林台・池田・本別教会主任司祭 鈴木 央師（旭川地区協力司祭）  
※鈴木師は帯広教会の居住となります
- ・釧路地区協力司祭 中村 道生師（大阪・生野教会主任司祭）  
※中村師は釧路の聖アントニオ修道院の居住となります

## ●付 記

- ・山内 実師（旭ヶ岡の家付き司祭）は、4月20日付けで派遣期間が満了し、長崎教区へ戻られます



# 祭壇奉仕者選任式・助祭司祭候補者認定式が行われる



3月21日（金）11時から北一条教会（札幌カテドラル）で、佐藤謙一神学生（宮前町教会出身）の祭壇奉仕者選任式と佐久間力神学生（伊達教会出身）の助祭司祭候補者認定式が行われた。



勝谷太治司教の司式で、司祭、修道者、信徒が約180名参加し行われた。勝谷司教は、自分の経験を踏まえ、司祭職を選ぶことは特殊な道を選択することであるが、自分も欠点は神学校時代に治まると思っ

ていたがそうはいかなかったり、神学生仲間でも靈性が深いと周りが思っていた人はやめて、自分を含めてこの人は？と思った人が残ってしまったことなど司祭職は神のなせる業としか思えないこと。そして、自分の弱さを見つめ、常に神の助けを求め、神の助けを感じ理解できるかであり、自分の力で司祭職を全うすると考える人は挫折していくだろうと語り、神学校で与えられた自分を見つめる期間を大切にするようにと述べられた。

式の最後に、出席者から花束が贈られ、両神学生は出席者の皆さんに、今までのお祈りと支援に感謝し、司祭になるための決意を新たにし、これからも、なお一層のお祈りをお願いしていた。

教区神学生は、4月から梶沼大介さん（元町教会出身）が神学校に入校し4名となります。これからも皆様のお祈りとご支援をよろしくお願いします。梶沼新神学生の皆様への挨拶と抱負を紹介します。

## 今年も教区神学生が神学校に入学

「ご挨拶させていただきます。」

梶沼 大介

カトリック札幌教区司祭を目指して、この4月に、日本カトリック神学院に入学させていただきました。函館元町教会出身の梶沼大介と申します。

昨年未だ16年余り、北海道警察の警察官をしておりました。

職業が警察官であったため、正義をつかさどる守護者「大天使ミカエル」の洗礼名をいただいております。

私が、元町教会のジェール・ロー神父様から洗礼のお恵みを受けたのは、2010年のクリスマスのことです。ので、わずか3年余りで、いままでの生活から一転し、神学院の門をくぐらせていただいたことに、本当に感激し、また神様の恵みの大きさを再認識させていただいております。

私は、1972年に旭川で、キリスト教とは全く無



縁の一般家庭に生まれまし

た。父親が証券会社に勤務するいわゆる転勤族であったため、幼少期は兵庫県、高校時代は静岡県浜松で過ごしました。

キリスト教との出会いは高校生の頃で、世界史の授業でキリスト教に触れるのが大変面白かったこと、修学旅行でキリシタン殉教地「乙女峠」で有名な島根

県津和野のカトリック教会を訪れた際に、長年の人々の祈りが染みこんでいるかのような古い石造りの教会に身を置いたとき、理屈抜きで言葉では表せない感覚を覚えたのです。

そして「教会に通ってみたい」と思うようになったのですが、私の周りにはクリスチャンは皆無で誰からも話を聞くこともできず、自分でとりあえず教会の前まで行ってはみるもの

の、若い頃はどこか保守的

で臆病だったこともあり、結局は中には入れずということを繰り返しました。

高校卒業後大学進学の間係で地元の北海道に戻りましたが、心の隅ではいつか教会に通いたいという火種がずっとくすぶっており、旅行でローマ・ヴァチカンを訪れたりもしたのですが、なかなか一歩を踏み出す契機とまではなりませんでした。

卒業後、警察官を拝命し、長い期間不規則で忙しく余裕のない日々を送っていましたが、2009年に父親の急逝に直面し、「人間いつ死ぬかわからない、後悔しない人生を送るためにすべきことがあるのではないか」と我に返り、長年の気持ち成就させるため一念発起し、勤務地であった函館の元町教会の門を叩かせてもらいました。

その後、神父様や代父母妻をはじめ皆さんから本当にたくさんのお恵みをいただき、無事洗礼へと導いていただくとともに、警察官という職業柄、日々現場において人間の営みの中にある厳しい現実を直視しなければならなかった私にとって、教会は心の洗濯の場と

なり、カトリック教会での信仰生活は欠かせないものになったと思います。

さて、私が司祭召命を考えるようになった動機ですが、洗礼を受け共同体の一員となったことで、カトリック教会が抱える問題も考えさせられるようになりました。

その最たることが、司祭の高齢化及び人員不足で、特に札幌教区は教区司祭が少なく、神父様が掛け持ちして複数の教会の主任を務めたり、教区の役職をこなさなければ等の現状であり、これは司祭にとっても信者にとっても不幸なことだと感じました。

私がまだ求道者であった頃、公教要理をしてくださったっていた代父さんから、「何事も権利を主張や行使するためには、義務を果たさなければならぬ。」

それと同じように、洗礼を受けてキリスト信者になれば、たくさん恵みを受けるが、同時に責任や義務、使命も背負うことになる。

私が今、あなたに公教要理をしているのも、1人の信徒としての私の使命です。いつかあなたも、次に続く誰かのために何かをし

てあげてください。」と言葉をいただいたことがありました。

「教会のため、共同体のために私が実践しなければならぬ使命」とは何か。一信者として教会のために積極的に役割を果たすことか。それとも・・・

そんなとき、自分が「独身」であるという幸運（最大のお恵み？）に気づきました。

司祭召命の少ないこの時代に、もし自分のような人間でもよいのであれば、大切なこのカトリック教会のために身を投じて働ければこんなすばらしいことはない。

すごく単純な動機かもしれませんが、自分でも不思議なくらいに迷いは無く自然と思うようになり、私は司祭召命を希望し、手を挙げさせていただきました。

そして、その後ここでは書ききれないたくさんのお恵みをいただき、私は今、神学院においてこの文章を書いております。

洗礼を受けて3年余りというところで、祈り・知識・様々なことにおいて、未熟で不十分であることは否めませんが、それでも神学生

として選んでいただいたことを誇りに思い、責任感を持って神学院生活に臨みます。どうか私が「神様の、そして札幌教区の皆様の忠実な道具」となれますよう、お祈りよろしく願います。

最後に、出身の函館元町教会のロー神父様と信徒の皆様、予備養成でお世話になりました札幌北26条教会の皆様、ここまで導いてくれた養成担当の神父様と後藤神父様、すべての札幌教区の信徒・司祭の皆様、そして、私の志を理解し退職の際に快く送り出してくれた北海道警察の元上司・仲間から感謝致します。



## 青少年の活動報告

### フィリピンエクスポージャー

#### イースタービレッジ(復活の村)のファミリーとして

札幌教区青少年委員会 鳥居 明子

1月2〜10日、今年も9名の高校生たちと共にフィリピン、ミンダナオ島に祐川神父が開設した児童養護施設「イースタービレッジ(EV)」を訪ねました。目的は高校生たちが「異文化に触れ、それを好きになること」です。

参加した高校生たちの中には、初めて北海道から出るといふ人がいました。私がそれを知ったのは旅が始まって間もなくのことでした。見知らぬ同行者たちと見知らぬ国へ旅立つ16歳の心境はどのようなものだったのでしょうか。

EVに到着するとすぐ、「Welcome to Easter Village Family」と元気な声で子供たちに迎えられました。彼らは臆することなく近づいてきてジェスチャーを交えて話しかけてくれました。その直後から、高校生たちは見よう見まねで流れ作業で大量の食器を洗ったり、手で洗濯物を洗ったり、彼らと一緒に踊ったり、バスケットボールを追いかけて、あつという

間にFamilyの一員として溶け込んでいきました。

高校生たちの好奇心とチャレンジ精神は旺盛でした。EVの青年たちの後についてココナッツの木に登ったり、鶏や七面鳥を絞めたり、伝統料理レチョンパボイ(子豚の丸焼き)の準備に最初から最後まで立ち会ったりもしました。ちよつとハードな体験もありましたが、命をいただいで私たちは生かされていることを学ぶ貴重な体験となったことは間違いありません。

一年ぶりに出会うEVの青年たち、特に女の子たちの変化にも目を見張るものがありました。昨年、恥ずかしがって遠巻きに見ていた彼らとは別人のように、積極的に高校生たちを誘い、大きな声でゲームをリードしてくれました。聞けば、今年も年長の子供(青年)たちが準備段階から関わったとか……。自分たちで考えたプログラムを盛り上げるため、一人ひとりが「おもてなし」の心で努力してくれたのだと知りました。こうしてフィリピンの若者と日本の高校生は言葉を超えて友だちイエ、ファミ



リーになりました。高校生たちのフィリピン体験は、今始まったばかりです。が、ここで新たに大切なものを彼らの感性で感じ取り、大好きなファミリーのいるフィリピンにこれからもっともっと興味を深めてくれることを期待します。

どうぞ、高校生たちとEVの青年たちの感想をお読みになってください。彼らの生き生きとしたフィリピンでの日々の様子が伝わってきます。そして2年連続参加した高校生の感想には成長を感じます。報告書は4月中に完成させ、各小教区へ配布の予定です。

## フィリピン・エクスポージャーに参加して

光星高校2年 木下 直哉

今回引率という立場ではありませんでしたが、勝谷司教さんは現地ですと私たちと共にいて見守ってくださいました。また昨年の司教叙階式にお招きした縁もあり、地元キタパワン教区のロムロ・デ・ラ・クルス司教さんやジェシー神父さん、フレッド神父さんもこのエクスポージャーを歓迎し、食事に招いてくださったりもしました。

日本の高校生とEVの子供たちや青年たちの成長を見守り、この体験旅行を支援して下さるEVのスタッフの皆さん、祐川神父さん、マニラでの移動の安全を確保してくれた佐藤宝倉神父さん、高校生のお兄さん役として旅の間中いつも行列の最後尾をキープしてくれた大学生のアカラくん、そして旅の安全をお祈り下さった札幌教区の皆さまから感謝いたします。



昨年度、この企画に参加した小川君からとても楽しく、いい経験になると聞いており参加しました。異国文化や他国の言語にふれるのがもともと好きで、すごく楽しみにしていた反面、フィリピンと聞くと治安があまり良くないといったマインスのイメージがあるため不安もありました。ですが行った結果、来年もまた行きたくなるほど楽しく、さらにフィリピンに住んでも良いと思えました。フィリピンでは日本だと普段の生活ではできないような多くの体験をしてみました。

まず、車の荷台に乗りながら移動したことです。フ

イリピンでは、公道でもトラックの荷台に乗って移動することがあります。さらに乗用車には定員があってもないようなもので、その車に乗れるだけ乗せるのがフィリピンです。ですが、そういったフィリピン文化に慣れてない日本人には少し危険だったので、Easter Villageの敷地内だけ荷台に乗って移動しました。僕は車の屋根にも上って移動したのですが、体感速度は思ったよりも速く、風が心地よかったです。

次に体験したことは、コナツツの木に登ったことです。みきとも登ろうとしたのですが、足を痛そうにしてギブアップしました。その後僕が登ったのですが、三分の一度登れまし

た。木には足を掛けるための切り込みが入っていて、最初は土踏まずのあたりで登っていて、あまりにも痛かったので踵で登ってみると思ったよりすんなり登れたので少しコツをつかめたように思えました。さらに、木の切り込みの間隔がとても大きく、登るときだけでなく下りるときもすごく大変でした。それでも木の半分も登っていなかったと思うとEaster Villageの人はすごいと思いました。

そして最後にフィリピンでは、捕まえた鶏や家畜の豚を殺して夕食にするという、少しグロテスクな体験もしました。その日の夕食で食べるための鶏を生きている状態から自分たちの手で殺すのです。鶏の胴体を

もう一人に持ってもらい、口を自分でおさえながら包丁で頸動脈を切り、血がある程度止まるまで待ちます。多くの鶏は止血する動きがなくなるのですが、いくつかの鶏は羽を動かしたり、鳴いたりしてもがいていました。鶏の首を切っているときはあまり何も思わなかったのですが、必死にもがいている姿を見て、これが現実なのかと思いました。普段の日本の生活では、パッケージングされた肉が店頭で売られていて、あまりありがたみを感じず購入し食べていました。ですが、このような経験をすることで、改めて感謝して食事をいただくことの大切さを実感しました。この当たり前だが、当たり前過ぎて薄らいでいく気持ちを忘れないように、これからの生活にいかしていきたいです。

今回エクスポージャーに参加して、すごく貴重な体験ができました。できれば、また来年も参加してEaster Villageのみんなに会いたいです。

## フィリピンから帰ってきて

手稲教会

高校1年 安藤 理花

私がこのエクスポージャーに参加した理由は、私の姉も以前にこのエクスポージャーに参加して自分のやりたいことを見つけられたらしく、私も自分を変えることができたらいいなと思ったからでした。

海外に行くのは初めてで、英語も喋れないのになぜか余裕をかまして勉強もせずに出発して、相手が何を言っているかも、どう



やって自分の気持ち伝えればいいのかもわからず、ダバオの空港に着いたときから不安になり、イースタービレッジで初めてジョイと話したときに全然会話がでなくて鳥居さんにごうしようと言きついたりもしました。

でも、そんな私にもイースタービレッジの人たちは優しくしてくれて、手を握って引っぱってくれて、キラキラな笑顔で、色々なことをたくさん教えてくれて、それがとつてもとつても嬉しくて、心がほかほかあったかくなりました。他の高校生メンバーのみんなも優しくして面白い人たちで、イースタービレッジでの日々は日本にいるときよりのんびりと感じられたけど、本当にあつという間でした。

フィリピンに来て見た、日本より高い空、透明で底まで見える海、とつても綺麗な星空、信号が無い道路、水しか出ないシャワー、高い高いヤシの木からダンテたちが落ちてくれたヤシの実、ジヨリビー、びっくりするほど甘くておいしいマンゴー、みんなで踊ったオチオオチオ、何もかもが

初めてでとても刺激を受けましたが、1番印象に残ったのは鶏と豚でした。血を抜かれたばかりで触るとまだあつたかい鶏の羽をむしったり、だんだん鳴くこともできなくなつて死んでいく豚を見てショックを受けて、そのお肉が夕食や朝食に出てきてもつとショックを受けました。ちゃんといただきますを言つて、初めて食べた豚の丸焼きはほつぺたが落ちるかと思うぐらいに美味しかったです。

辛いことや悩んでしまったこともあつたけど、フィリピンで経験したことも、イースタービレッジの人たちといっぱい遊んでいっぱい笑つたことも、全てが私の人生で大事な大好きな思い出になりました。私は絶対にこの思い出を忘れません。

フィリピンに行っている間に、姉のように変わることはできなかつたけれど、この9日間がこれから自分を変えるきっかけとか、支えになればいいなと思います。

日本に帰つてきて、みんなと繋がりがたくてフェイスブックを始めて、もっと英語ができるようになりたいと思つたので、たくさん勉強して、また来年にもエクスポージャーがあつたら参加してみんなに会いたいです。

語ができるようになりたいと思つたので、たくさん勉強して、また来年にもエクスポージャーがあつたら参加してみんなに会いたいです。

### フィリピンに行つて

真駒内教会

高校3年 藤川 衛

私は1月2日から10日までフィリピンのミンダナオ島に9日間滞在して素晴らしい経験をしました。

最初は鳥を絞めたことと「にわとりを絞める」と聞いた時、自分にはわとりをどう殺すのだろうと興味を湧きました。しかしにわとりを絞めた後、にわとりがかなり苦しそうにもがいている姿を見て自分の頭の中でこう思いました。普段、食卓でおいしそうに食べている鶏肉は、かなり苦しい思いをして死に私たちの食卓にあがるのかと思うと、私は、本当に食べ物に感謝しなければならぬと思ひました。

次は、生まれて初めてヤシの実際のジュースをヤシの実から直接飲んだことや近くの川で男の子と一緒に遊んだことです。

ヤシの木は、とても高く登つたら怖いと思ひました。その時イースタービレッジの男の子達が、ヤシの木に登つて、ヤシの実を採つてくれました。すぐ、その場でヤシの汁を飲みました。飲んだ時の味は思つていたよりも甘く、冷蔵庫に冷やせばさらにおいしくなると思ひました。

その後、近くの川へ行きました。川に行つた時は川で泳ぎ慣れていないので、川に入るつもりは無かつたのですが、エクスポージャーに参加した人に背中を押されて川に落ちてしまつて、結局は川の中に入つて男の子全員で川遊びをしました。しかし、泳いでみるととつかり楽しい気分になりました。

楽しかつた出来事もありました。まず「フィリピンデー」のことです。「フィリピンデー」とはイースタービレッジの子ども達が私たちがエクスポージャーのために様々なパフォーマンスやゲームをするイベントです。私ははじめあまり乗り気ではなかつたのですが、いざ参加してみると、自分でも思つてみないほど楽しんでいました。

特に印象に残つていたゲームは、女装レースでした。女装レースとは、まず女の子の姿をして、足にほうきを挟んでリレーをする競争です。ちなみにいちいち着替えからスタートしなければならぬので、結構時間のかかる競技です。ルールの説明を聞いた時「やるのあれ？」と小声で、ついつぶやいてしまいました。いざ、やってみるとハイヒールが芝生の中に食い込んで、歩きにくいわ、靴は抜けるわ、しかも足に挟んでいたほうきは何度もおちてしまうなど、恥ずかしかつたし、体力をつかいました。

その夜、イースタービレッジの子ども達が歌のお披露目してくれました。歌を聴いてみるとみんなこの日の為に一生懸命練習したんだなと思ひました。その時、私は、なんとエクスポージャーの代表として、一曲歌うことになりました。サザンオールスターズの「ツナミ」を歌いました。歌っている時、歌を聴いている人達から温かい声援が送られて私の心はすっかり桑田佳祐になっていました。

次は、生まれて初めてヤシの実際のジュースをヤシの実から直接飲んだことや近くの川で男の子と一緒に遊んだことです。

次に印象に残つたのは、イースタービレッジでの最後の夜の「ジャパニーズデー」です。我々エクスポージャーは、日本のお正月を説明しました。そこで、私は、鏡餅の説明をしました。しかし、普通に鏡餅の説明をするのは面白くないので、わたしは面白い説明をしようと考えていました。

まず、「チャラ男風」にイメージチェンジをしてしゃべり方もアメリカのコメデイアン風に表現したところ、見事に成功しました。フィリピンの人から「のび太コール」が沸き起こりました。ところで、なぜ「のび太コール」になつたかという点、実は、イースタービレッジでの最初の自己紹介で「マイ ニックネーム イズ のび太」と言つたからです。その為イースタービレッジの子ども達から、私は「のび太」と呼ばれました。

その後、少し待ち時間ができたので、自分は「のび太のサイン会」という臨時のイベントを開きました、すると、イースタービレッジの男子から「のび太 サイン プリーズ」とせきたてられて、サイン攻めにあ

その後、少し待ち時間ができたので、自分は「のび太のサイン会」という臨時のイベントを開きました、すると、イースタービレッジの男子から「のび太 サイン プリーズ」とせきたてられて、サイン攻めにあ



いました。その時の気持ちは、まるでスターになった気分、とてもうれしかったです。

フィリピンで困ったこともありました。

一つ目は、トイレに便座がなかったことやトイレレットペーパーが無かったことです。この事は、フィリピンに行ったら一番と言っても良いくらい「カルチャーショック」を受けました。少し古いお店ならともかく、

ダバオで一番大きいショッピングモールにもトイレレットペーパーが無く、しかも一カ所便座が無かったことに、フィリピンのトイレ事情が遅れていると思えました。私が、もしフィリピンの百貨店の経営に携わるとしたら、まずトイレから直して行くと思います。

フィリピンの薬局でかゆみ止めを買った時も困りました。英語力の無い私は、かゆみ止めを買う時、最初に腕をかゆそうにかく仕草をして、次に「ストップ」

「ドラック」と何回も言いました。すると薬局の人が錠剤を持ってきて、私は「ノーノー」と言っ、今度は塗るしぐさをしました。するとイースタービレ

ッジの男子が、もしかしたら「これ？」と塗り薬のよなものを出してきました。それで私は、この場で何とか買うことが出来ました。その薬は日本のものよりすくにおいの強いものでした。

日本とフィリピンの教会の違いは3つあると思います。

ひとつ目は、ミサの賛美歌がスピーカーからノリのあるメロディーで流れたことです。この時、楽しい気分になり「こういう賛美歌だったら、毎週教会に行ってもかまわない」と思いました。

二つ目は、「主の平和」と言って手を合わせることをフィリピンでは「ピース」になっていて、フィリピンの教会は、少しユニークだと思いました。

三つ目は、フィリピンではお祈りの最後に「アーメン」ではなく「イーメン」なっていました。何故このようなことになったのか理解が出来ませんでした。

フィリピンでの礼拝は、日本での礼拝と違って楽しい礼拝だから、フィリピン人はキリスト教信者が多いのだなと思いました。

たくさんの支援のおかげで素晴らしい体験ができて、本当に感謝します、特に私たちに同行してくださった勝谷司教様、祐川神父様、鳥居さん、本当にありがとうございました。

## フィリピンは良い

大森教会

高校2年 佐藤みきと

私は忘れる人間です。去年の一月、今回のエクスポー ज्याと同様にフィリピンに行ってきました。そのとき、大きな感動を覚えました。人生観が変わったと言っても過言ではありませぬ。しかし、私は一年という月日の中でそれを忘れていました。「感動した」という事実は覚えていますが、それが感覚にどのようのものだったか思い出そうとしても、なぜか、思い出せない。でも昔の自分が「行け」と背中を押しています。正直、怖さもありました。

当たり前ですが、行って良かった。二度目のフィリピンエクスポー ज्या。勝手にプレッシャーを感じていました。この作文の存在

も時々、頭をよぎったり。当然ですが、日本に帰ってきたら「どうだった？」と聞かれるんです。「楽しかったです」と答えると、教会の人達は親切ですから「そう。良かったね」と言ってくれるのですが、果たしてこんな幼稚な返答で良いのだろうか。とすぐに自問自答に陥ってしまいます。教

区からも、教会からお金の面で支援していただいているのに、もっとちゃんと回答を。と使命感に追われます。でも、「楽しかった」というのは嘘でありませぬ。百聞は一見に如かずという側面が強いような気がしています。現地では、主にイースターヴィレッジの人達と交流することが主眼に置かれていたので、ジェスチャーを含めた会話や、遊び、食事を通して同じ時間を過ごしました。大きな事件はありません。強いて言えば日本人のメンバーが部屋の鍵を無くしたくらいでしようか。夜中、懐中電灯を片手にみんな芝生の上を探して回りました。

私は演劇部に所属しています。大根役者にとっ、で当たり前なことだけど、

きないことは「目的を持つ」ことです。たとえば怒っているストレスを発散したいはずなのに、「セリフを強く言うこと」に主眼を置いてしまったりと、目的と手段が逆転する本末転倒な芝居が大根役者には多いわけです。フィリピンの道はこぼこで、トイレも日本から言えば汚い、商売も雑。例をあげればあげるほど、

発展途上国ならではの欠点と見えるものが浮き彫りになります。しかし、どうしてか私はそれが悪いように思えないのです。目的を求めているから。決して手段が充実しているとは思いませんが、日本と違って「目的」が明確です。日本は「手段」が「目的」を追い越しているような気がしてならないのです。本末転倒です。私はすべてを知らないわけですから、一概にフィリピンの現状が良いとは言えませんが、私はその「雑」な部分ですら好きなのです。

また、私はフィリピンにイースターヴィレッジがあることを素晴らしいと感じます。日本より行政等が確立していないように見えるフィリピンでこの施設を作ったことの凄さにも驚かされます。異国の地でこの施設を作ったことを想像しただけで気が遠くなりま

す。祐川神父さんはピサヤ語を現地で習得して、小さな建物から始まって、現在のイースターヴィレッジという小さな村を作りました。正直、私にはそんなことはできません。自分のできることと言ったら、こんなところがあるのだということ日本人に伝えることから、寄付はしません。しかしどんな形にせよ、こ

うやって出会ったものは無駄にはしたくない。一生何らかの形で関わっていたいと思います。

住めば都。この短期間でフィリピンが故郷のように感じられます。今はフィリピンに心があるような気がします。フィリピンから帰ってきて、調子が全然出ないのです。さっきまで飛行機に乗ってフィリピンに向かっていたはずなのに、

いつの間にか日本にいる。将来、フィリピンに住んでもいいかも、と思っっている自分がいます。文章力が無いので、フィリピンの魅力を伝えきれな





### 札幌カリタス 社会福祉シンポジウム開催

9月20日(土)午後1時30分(開場は午後1時)から北11条教会で開催します。

今回はマザーハウス(※1)代表の五十嵐弘志さんの講演会とわちあいです。

「主キリストと獄中で、出会い、その喜びの深さ、大きさ、深さ、高さ、広さを体験した元受刑者」のお話です。

五十嵐さんは、1964年2月10日生まれで、栃木県出身。前科3犯、受刑歴約20年の人間が、獄中で主イエス・キリストと出会い回心し、出所後、祈りと真の愛を実践するために、民間非営利団体“マザーハウス”を設立。

「神の愛の宣教者会」の修道女との交流で、マザーテレサを信仰の母と思うようになり、受刑中に、各地の司祭、修道女と知りあって、文通、面会、本の差し入れなどを受け、出所後も、彼の新しい活動である“マザーハウス”を、支えてもらっています。

闇の中にいる人々に、イエス・キリストの愛を伝えていて、彼は、今、「人生は、出会いで決まる」と話し、キリストの証人として活動中です。

(※1) マザーハウスは、元受刑者7名をサポートし、約50名の受刑者と文通や面会を行っています。また、刑事裁判で証人として出廷し、裁判官・検事官の前で、キリストとの出会いを証言し、教会・大学などで、「受刑体験、キリストとの出会い、更生とは？」などの講話を行っています。そして、何よりも受刑者の更生に力を注いでいます。

### カリタス家庭支援センター 10周年感謝のミサと集いのお知らせ

開催日 2014年5月17日  
ミサ 北一条教会 10:00~ 司式 勝谷太治司教  
茶話会 カテドラルホール13:00~

カリタス家庭支援センターは、本年5月で開設10周年を迎えます。この10年間札幌司教区、札幌カリタス、各教会の信徒と市民の皆様へ支えられながら活動させて頂いていることを心から感謝いたします。

相談件数は年々増加の傾向にあります。相談者一人の抱える問題は複雑化し、相談期間は中長期化しております。したがって他機関との連携が幅広く求められています。利用される方は教会関係以外の方が約60%になります。相談経路は教会関係、再来、他機関の紹介などで、札幌地区から北海道全域に及び、本州からの利用もあります。

カリタス家庭支援センターの特徴は、カトリックの理念で、民間団体として、行政の法的縛りや利害関係がない自由な立場で、信徒と市民の皆様への支援活動が行えることです。「救命救急的役割」「橋渡し」「自発性を引き出す」などの役割も担っております。

公的助成を受けない自由な活動は、一方では財政的な困難も伴います。カリタス家庭支援センターは、会費・賛助会費・ご寄付で支えられておりますが、これからも皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い致します。

「神の愛を具体的に、生活の場に存在させるところ、それがカリタス家庭支援センターなのです。」という職員研修での中江神父様のお言葉を心に刻み、これからも活動していきたいと思っております。

### 高遠菜穂子さんの お話を聞く会

月寒ピース9の会の主催

「テロとの戦い」を掲げ、「イラク国民に自由と民主主義を！」と強引に押し進められたイラク攻撃。イラクは今、新たな“独裁”、“宗派対立”に苦しみ、世界中に「テロの脅威」が広がっています。私たちはいったい何を間違ったのでしょうか。日本人質事件から10年。現在もイラク支援を続ける高遠さんにお話をうかがいます。また、イラク戦争の経過と現実を通して、現在、安倍内閣の下ですすめられようとしている集団的自衛権容認や憲法改正の問題についても考えます。

日時：5月17日(土)  
13:30~15:30  
会場：カトリック月寒教会  
札幌市白石区栄通2丁目11-6

### 福音の視点から平和を考える 松浦悟郎司教の憲法講演会

札幌地区カトリック正義と平和委員会と札幌地区社会委員会が主催

◆入場無料◆

~戦争できる国へと突き進む日本の中で~  
連日のように報道されている“集団的自衛権”とはいったい何か？それを認めることの意味・目的は？交戦権を認めない憲法との関連は？などの問題について、福音の視点から松浦悟郎司教(大阪大司教区)にお話いただき、語り合います。

日時：2014年5月31日(土)  
13:30~16:00  
会場：カトリック北26条教会  
札幌市東区北26条東1丁目  
(地下鉄南北線北24条駅下車徒歩10分)  
共催：日本カトリック正義と平和協議会

### 円ブリオ北海道が 20周年記念講演会開催

6月29日(日)午後1時30分から道新ホールで、講師に乙武洋匡氏を迎えて、「みんなちがって、みんないい」をテーマに、生命の尊重を考える講演会を開催。

共催は藤学園で、主な後援は札幌市、札幌市教育委員会、札幌市社協、札幌市PTA協議会、天使大学、札幌光星学園などである。

入場料：1800円  
(学割・当日券はありません)

託児：無料で先着10名まで  
申込・問合せ：円ブリオ北海道  
電話：011(736)5580

